

今年も夏がやって来ました。お盆の季節です。

かつて、関東地方の多くでは、釜蓋朔日(かまぶたついたち)といって、お盆の月ついたちの一日、又は七日をお盆の始まりの日として、みんな一斉にお墓のお掃除をし、自宅では盆ぼんだな棚の飾り付けの準備を始めていました。

お盆にはご先祖様や亡くなった方々が、遙か遠くから帰ってくるといわれますが、それには1～2週間くらいはかかると考えられていたのです。ですから、ご先祖様もおなかが減るのではと考え、盆棚には、ぼたもちや御饅頭などをお供えするので、また、歩いて帰って来られますから、盆路ぼんみちづく作りといって、道路の掃除や草刈りをする地域もあったようです。昔から伝わる風習です。

お盆の帰省ラッシュは、生きている私たちだけではなかったのですね。

盆棚には「ほおすき」をよく飾りますが、これはもともと薬草として用いられ、野外で日射病になった人を治療するために使われていたものでした。関東では特に、七月十日浅草の観音さまのたいくどくび大功德日となっている、しまんろくせんにち四万六千日の「ほおすき市」で広く親しまれています。観音さまにお参りしてたくさんの功德を積み、迷いを捨てて気持ちの居住いすまいを正してご先祖様を迎える心の準備をする、ということでしょうか。

十三日は、いよいよ迎え盆です。お麻がらを折って火を付けてみともあかしを灯し、その煙に乗って精霊(しょうりょう)さまはおいでになると、高村光太郎は『迎火』とむかえびいう詩に読んでいます。

今は外でも室内でも煙を出しにくいご時世ですが、地域によっては今でも迎火でおご先祖様をお迎えします。

盆棚にお供えする長いそうめんにも、それを伝ってご先祖様方がいらっしゃる、または、遠くからせっかく見えたので長くいて欲しいという願いが込められています。お帰りになるときのお土産の荷物ひもを縛る紐であるという説もあり、さまざまな言い伝えがあります。

この様な昔から伝わる風習は、遠くからいらっしゃるご先祖様のご苦勞を思いやり、おもてなしをするという心が、形として現れたものです。

お盆の行事を丁寧に行うことを通じて、ご先祖様を思いやる私たちの心と、私た

ちを思うご先祖様の心が一つになる良い機会になるのではないのでしょうか？
ありがたいことですね。改めて、ご縁のつながりに感謝したいものです。

— 終 —